

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	アカデミック・ライティングとムーブ分析：日本語研究論文作成指導に焦点を当てて
Author(s)	永井, 敦; 柳本, 大地
Citation	広島大学森戸国際高等教育学院紀要, 6 : 21 - 36
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55626
URL	https://doi.org/10.15027/55626
Right	
Relation	



アカデミック・ライティングとムーブ分析 —日本語研究論文作成指導に焦点を当てて—

永井敦・柳本大地

Academic Writing and Move Analysis: Focusing on Teaching How to Write Research Articles in Japanese Atsushi Nagai, Daichi Yanamoto

In the field of research on Japanese academic writing, there is still a limited number of researchers and practitioners who show explicit interest in genre studies, despite its promising potential for educational applications. Against this background, the present paper provides a general introduction to some important concepts of genre analysis, such as “move” or “step,” with a view to their applications in educational settings. We first explain John M. Swales’ “Create a Research Space” (CARS) model in genre studies, and then move on to review existing genre-analytic research studies, focusing on Japanese research articles as well as those that attempt to incorporate the findings of genre studies into their teaching in Japanese higher education. Based on the narrative review, some possible future directions are suggested.

Keywords: *academic writing, move, genre analysis, genre studies, research articles*

キーワード: アカデミック・ライティング、ムーブ、ジャンル分析、ジャンル研究、研究論文

1 はじめに

学術的な文章を作成するスキル、すなわち、アカデミック・ライティングスキルは、高等教育で学ぶ者にとって不可欠である。授業での成績評価においてレポートの持つ割合は大きく、また、学生の多くは、学位プログラムの修了間際には卒業論文あるいは修士論文などの学位論文という、一定の文章量を持つ学術的な文章の作成が求められる。ゆえに、アカデミック・ライティングは高等教育で学ぶ学生にとって基礎的なスキルと言える。

アカデミック・ライティングを効果的に行うには、多様な知識及びスキルが求められる。適切な語彙や文体を選択すること、文法的で読みやすい文を作成すること、パラグラフ・ライティングを用いて論理的な文章を書くこと、適切な引用を行うこと、説得的な論証を展開することなどは、アカデミック・ライティング教育における重要な教授事項であろう。

近年のアカデミック・ライティング研究及びその関連分野であるジャンル研究では、効果的なライティングには、書くべき文章が属するジャンル（例えば「論文」や「レポート」もそれぞれジャンルを成す）を意識することが重要であるとされる（Swales, 1990）。「ジャンル」（genre）とは、テキストそのものではなく「テキストの分類」（Tardy, Caplan & Johns, 2023: 7）である。また、ジャンルは「談話コミュ

ニティ」(discourse communities) —特定の言語的慣習を共有する人々—によって形成される(Tardy et al., 2023)。例えば、数学者と呼ばれる人々の振る舞いや言葉遣いには共通性があり、数学者が生み出す論文は一つのジャンルを構成している。よって、数学の研究者を目指す者は、これらの慣習を身につけることが重要であり、専門教育とはそれを実現させるための過程とすることができる。

ジャンル研究(genre studies)は、談話コミュニティにおける言語使用を機能面から分析してきた研究領域である。本稿では、ジャンル研究が提案してきた概念の内、特に重要なものとして「ムーブ」(move)(Swales, 1990)¹に注目する。これは、例えばある学術分野の専門家集団が研究論文を作成する際に使用する言語には、一定のパターンが認められることをふまえ、その特徴(論文の「序論」における論理展開の仕方など)を明らかにするための分析概念である。ムーブ概念の重要性は、文法的で論理的に構成された文章が、必ずしも説得的な研究論文にはならないという事実において際立つ。なぜなら、当該の研究分野において価値ある研究論文として認められるには、その典型的な構成に沿って論文を書かなければならないだけでなく、さらに、論文の序論部分においては「先行研究をレビューし、残された研究課題を明らかにする」のように、所属する談話コミュニティが期待する「動き」、すなわちムーブを適切に取り入れなければならないからである。特に、この後者の例で捉えられようとするものがムーブである。なお、ムーブは、言語形式と関連は持つものの、その本質は文章の説得性に関わる「修辭的」(rhetorical)な概念である。

ジャンル研究は、Swales(1981)に見られるように、海外では1980年代から始まったが、日本では、1990年代頃から、日本語論文を対象にジャンル分析的研究が行われてきた。初期の研究としては、工学系論文の序論を分析した佐藤・仁科(1996)や人文社会科学系論文の序論を分析した杉田(1997)がある。その後、農学及び工学系論文を分析した村岡・米田・因・仁科・深尾・大谷(2005)や法学分野の論文を扱った木本(2006)のように、対象分野が広がり、やがて大島・佐藤・因・山本・二通(2010)らによる人文科学・社会科学・工学の計270篇の論文(の序論)を分野横断的に分析した画期的な研究へとつながる。また、佐藤・大島・二通・山本・因・山路(2013)は、大島他(2010)と同じ270篇の論文を対象に論文全体の構造の類似性と相違性を分析し、研究論文に関する4つの基本類型を提案するなど、海外のジャンル研究に勝るとも劣らない独自の研究成果を生み出している。以降も、ジャンル分析を個別分野に応用した研究や、論文の類型に基づいてさらなる分析を行う研究が行われ

¹ 文献では、ムーブに基づく分析を「ムーブ分析」(move analysis)、「ムーブ/ステップ分析」(move-step analysis)または「ジャンル分析」(genre analysis)と呼ぶ。これらの言葉の前に「修辭的」(rhetorical)という言葉がつくこともある。例えば、Casal & Kessler(2024)は「修辭的ムーブ/ステップ分析」(rhetorical move-step analysis)という言葉を用いている。

ている²。また、日本語ジャンル分析の知見を日本語教育の教室現場に積極的に取り入れる試みも報告されており、一定の成果を挙げている（永井・柳本, 2021, 2023; 大島, 2009; 佐藤, 2006, 2009）。

このように、国内においても、ジャンル分析の手法を用いた研究が 90 年代より継続的に行われ、学術的知見が徐々に蓄積されつつあるものの、その絶対的な研究数及びこの分野の研究に関心を持つ研究者及び実践者の数は未だ限られているように思われる。その理由の一つに、ジャンル分析が知られていないということがある。実際、ジャンル研究に関わる論文は多いが、入門的文献は少なく、アカデミック・ライティング教育に関わる者であっても、ジャンル分析について学ぶ機会があるとは限らない。だが、ジャンル分析は多様な文章の作成に応用できる考え方であり、言語教育においては有用な考え方である。よって、筆者らは、ライティング教育に携わる、より多くの実践者及び研究者がジャンル分析について知る機会を提供することには一定の意義があると考えた。

以上を背景に、本稿は、ジャンル分析及びその知見がアカデミック・ライティング教育の改善へ貢献する可能性をふまえ、その中心概念である「ムーブ」について紹介すると同時に、日本語論文を対象としたジャンル研究について整理する。本稿では、筆者らの関心及びこれまで最も多くの研究がなされている「研究論文」というジャンルに焦点を絞るが、ムーブ分析の考え方は、多様なジャンルにも応用可能である（Casal & Kessler, 2024: 83）。なお、第 2 章はジャンル分析についての説明が続くため、日本語論文を対象とした具体的な研究について関心がある読者は、先に第 3 章を読むのも良いだろう。

2 ムーブ分析とは

2.1 ムーブとステップ

「ムーブ」とは、「書かれた、または、話された談話において、ある一貫したコミュニケーション上の機能を果たす談話的、または修辭的単位」（Swales, 2004: 228）である。より簡潔な言い方では、それは「文章を書き手の意図という視点から分析した概念」（永井・柳本, 2021: 44）である。ムーブの具体的な内容は個別のジャンルによる。また、ムーブは語、句、文、複数の文、パラグラフなど、多様な言語形態で実現される（Casal & Kessler, 2024; Swales, 2004）。つまり、ムーブは形式的（formal）

² 我が国では、特に雑誌『専門日本語教育研究』（専門日本語教育研究会誌）において、ジャンル分析を用いて日本語文章を分析した研究が活発に発表されている。

な単位ではなく、あくまでも機能的 (functional) な単位である (Swales, 2004)³。例えば、語の持つ内容が核となって実現されるムーブの例として、「この結果は...を示す」という文型が挙げられる。ここには「結果」という語が使われており、この文が「研究論文」というジャンルにおいて、例えば「研究結果を報告する」機能を果たしていると言えるだろう。「結論として...」のような句があれば、その文は研究論文の議論の総括を行う機能を果たしていると解釈できる。

ムーブは、実際の文章においては、その下位要素である「ステップ」 (step) の集まりによって構成される。ステップとは、ムーブと比べて「より狭く定義される、テキストの断片に関わる機能的な単位で、修辭的ムーブの実現に貢献する」ものである (Casal & Kessler, 2024: 82)。つまり、ステップは、テキストの断片 (その多くは文) についての解釈が、より具体的なレベルで表される点でムーブと異なる (Moreno & Swales, 2018)。もし研究論文のジャンルにおいて、「研究結果を報告する」というムーブがあるとすれば、そのムーブの実現には、「発見したことについて (findings) について報告する」 (“結果は...であることを示した”) や「図表に基づいて結果を報告する」 (“表 X/図 X は...を示している”) など、より細かな表現が用いられることになる (なお、これらのステップの例は保田 (2021) に基づく)。

ムーブという概念は、John M. Swales が行った、研究論文に関する一連の研究の中で発展してきた。その出発点となった Swales (1981) では、4つのムーブが研究論文の序論について提案されていたが、Swales (1990) では、図 1 に示すように、3つのムーブ及びその構成要素であるステップが提案されている (日本語訳は保田 (2021) に基づく)⁴。

Swales (1990) は、図 1 の枠組みを「研究領域創造」 (*Create a Research Space: CARS*) モデルと呼ぶ (日本語訳はスウェイルズ・フィーク (1998) に基づく)。同モデルは、書き手が序論での議論の明示性を徐々に高めつつ論点を焦点化していく様子を表現する。研究論文の序論では、ムーブ 1 からムーブ 3 まで順番に展開され、その流れに沿って各ステップが使用される傾向にある。だが、ここには絶対的な順序性があるわけではなく、実際の文章では様々な順序でステップが登場する。なお、図 1

³ただし、文法形式とムーブは完全に無関係ではない。英語論文の例だが、否定形や否定表現は先行研究のギャップの同定を指摘する場合に使用されやすく、直示表現や代名詞 (“In this paper, we propose a new model...”) などは「本研究を提示する」というムーブ 3 (後述) の始まりを示す表現として使われる傾向がある (Swales, 2004: 229)。

⁴ムーブ 2 のステップ 1D については、Swales (1990: 142) によれば、「残された課題は、球面収差 [= 光学の専門用語] をよりうまく制御する方法を見つけ出すことである」 (“The remaining issue is to find a way of better controlling spherical aberration.”) という文が一例である。先行研究をふまえて、その知見を発展させるための課題を指摘する機能を持つ表現である。ただし、Swales (2004: 229) も名称の適切さを問題視しており、後のモデルでは修正されることになる。

のムーブ1からムーブ3の名称に、やや見慣れない表現が使用されているが（例えば「ニッチ」）、これはSwales（1990: 141-142）が、自身の分析の説明に生態学からの類推を用いたことに起因している。

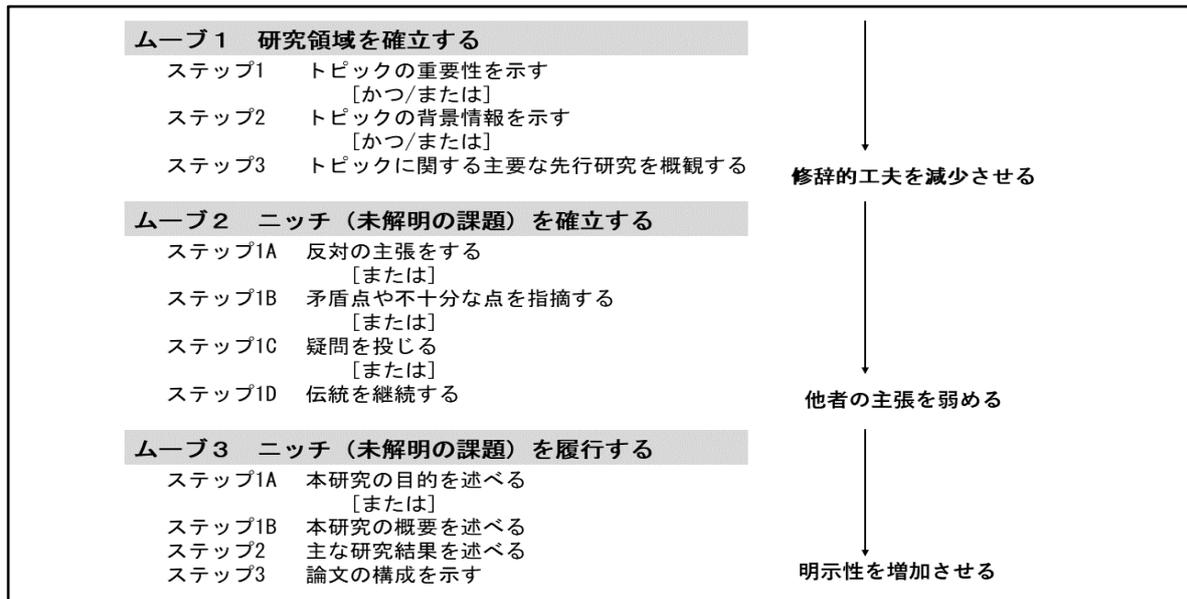


図1 研究論文序論のCARSモデル（Swales（1990）を基に筆者ら作成）

ムーブ概念を実際の論文分析にどのように当てはめることができるか、日本語論文の一部を用いて例示する（図2）。説明の分かりやすさのため、ステップに相当する表現には下線を付すこととする。

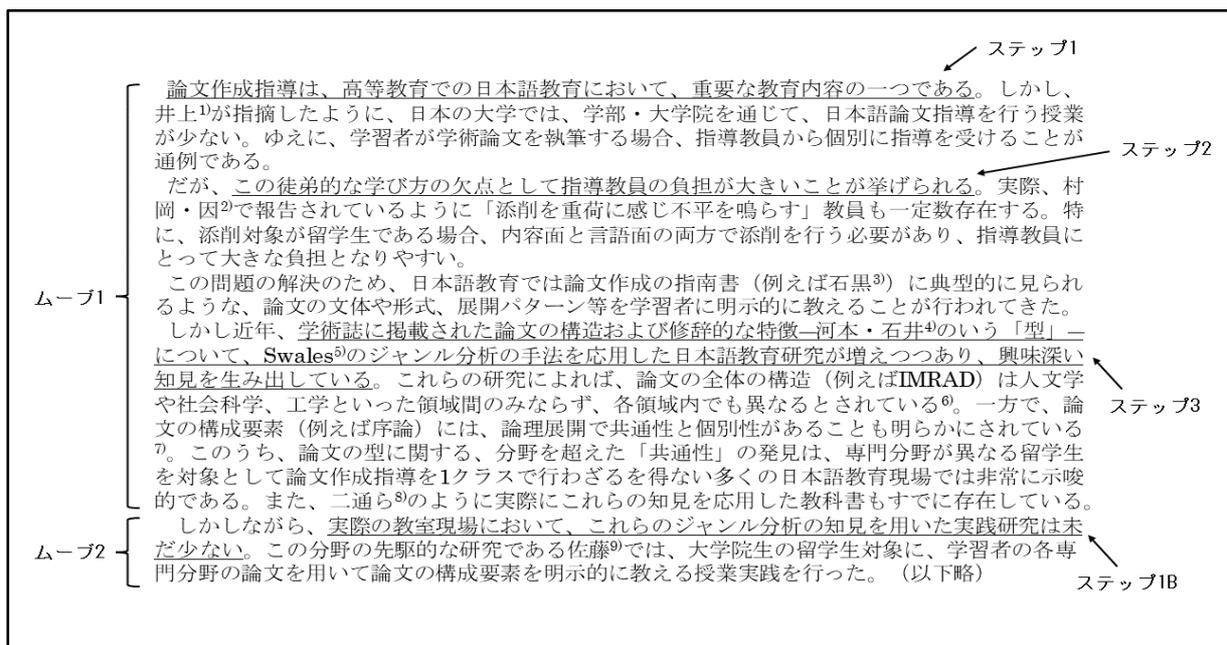


図2 研究論文序論のムーブ/ステップ分析例

図 2 に示されているように、この例で扱った論文（永井・柳本, 2021）の序論の流れは、CARS モデルに合致する形で論述が展開されている。この序論では、各ステップが各パラグラフの先頭の文（トピック・センテンス）として実現されている点でも分かりやすい。なお、上記の説明では単一のステップは単一の文で表現される印象を与えかねないが、実際には「意味的な 1 つのまとまりと捉えられる文の集団が見られた場合は文単位にこだわらず、その文の集団全てを同一のステップに分類」（木本, 2006: 21）する方が正確だろう。ただし、分析の厳密さを追い求める議論は、ともするとライティングへの応用という、本来の目的を見失うことにもつながる。ゆえに、実用重視の立場からは、ムーブ/ステップの分析面での曖昧性のある程度許容することも肝心である。

ムーブには他にもいくつかの特徴づけができる。まず、1 つのムーブの長さは様々であるが、通常最低 1 つの命題（proposition）を含むとされる（Connor & Mauranen, 1999）。また、Biber, Connor, Upton & Kanoksilapatham (2007) は、ムーブの種類について、頻繁に使用されるものを「慣例的」（conventional）と、逆にあまり使用されないものを「随意的/任意的」（optional）とする。さらに、上で指摘したとおり、序論は必ずしもムーブ 1 からムーブ 3 まで直線的に用いられるとは限らない。実際、同じムーブが、後の論述で再び使用されるという循環性を示すことがある。このことを Swales (1990: 140) は「再利用」（recycling）と呼び、Swales (2004) で提案した改訂版 CARS モデルにその点を組み込んでいる（図 3）。

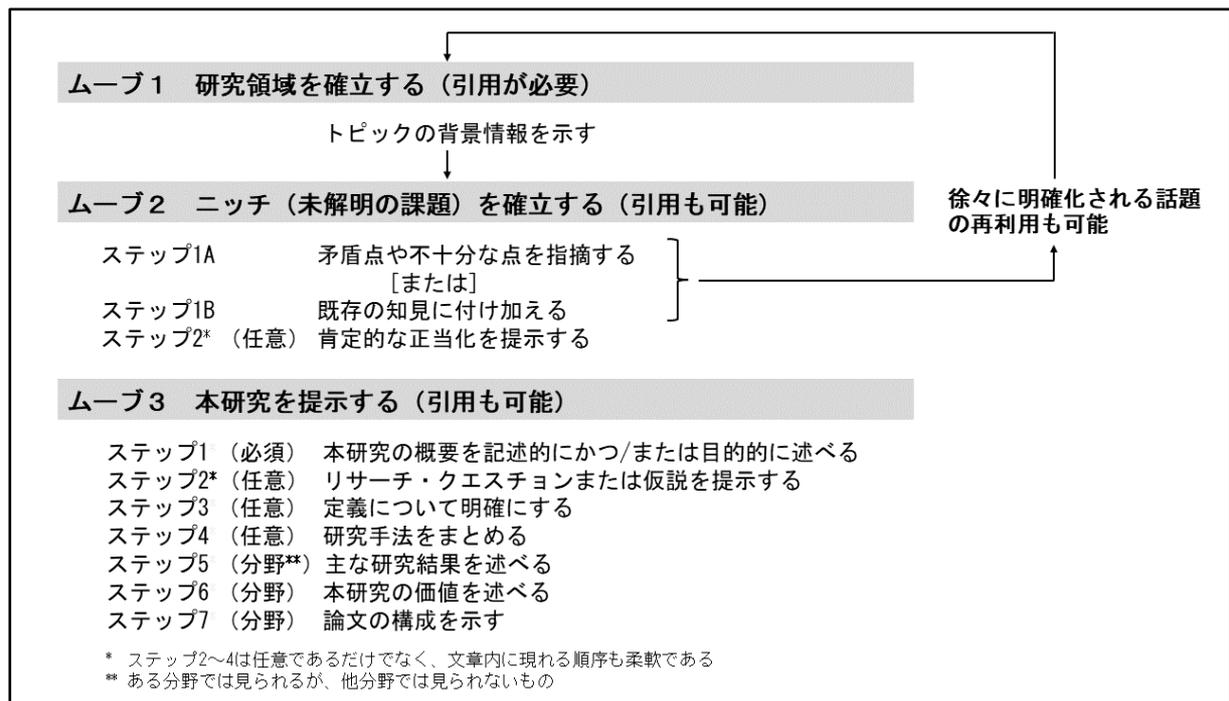


図 3 研究論文序論の改訂版 CARS モデル (Swales (2004) を基に筆者ら作成)

2.2 ムーブ/ステップ分析の手順

ムーブ分析を行う上で、ある程度共通と見なされている手順が存在する。テキスト分析において、機能的方法によってテキストの意図や境界を同定するには、言語的な基準に依拠するよりも認知的な判断が必要とされる (Biber et al., 2007: 32)。以下は、Biber et al. (2007: 32) が提示している、ムーブ分析の一般的な手順である⁵：

- (1) あるジャンルのムーブのカテゴリーを同定するために、分析するテキスト全体の修辭的な目的を掴む
- (2) 注目する各テキストセグメントの機能を見定め、その局所的な目的を評価する
- (3) 同定されたテキストのセグメントの中で、互いに比較的に近接する、または、そのジャンルを表す様々なテキストの同じ場所に生じるものの間に見られる共通の機能的・意味的なテーマを探す

ムーブ/ステップ分析を用いた先行研究では、これまでは限られた数のテキストを対象に質的な分析を行うことが一般的であったが、近年は多様な分析手法を用いた研究が行われている。例えば、コーパス分析を利用し、より複雑で一般化可能なテキストの特徴を発見する試みがなされている (Biber et al., 2007; Cortes, 2013)。また、複数言語でのテキストを比較する研究 (Moreno & Swales, 2018) や、対象ジャンルにおける書き手の思考を理解するため、同分野の専門家へのインタビューに基づいて、分析の妥当化を目指すアプローチもある (Hyland, 2012)。もちろん、どのような分析手法を用いようとも、ムーブ/ステップの同定には質的判断が常に介在し、分析結果は機能的な視点から解釈される必要がある (Biber et al., 2007)。だが、研究手法の多様化は得られるデータの多様性へとつながり、より妥当な知見の生成へとつながることに疑いはない。

一方で、近年のジャンル研究における言語学的分析手法の高度化とそれを用いた研究の増加に対しての批判もある。この分野での研究を先導してきた Swales (2019: 77) は、ジャンル研究の将来について見解を述べる中でムーブ/ステップ分析を用いた研究の課題を整理している。その一つは、ムーブ/ステップ分析は記述に重点を置くものが多く、解釈や説明の視点が弱いことから、質的研究で言われる「厚みのある記述」を欠くという指摘である。また、教育への応用という視点では、様々なジャンル (学術論文、報告書、研究発表、エレベーターピッチなど) の共通の構造にこだわ

⁵ なお、厳密な学術研究では、ムーブ分析の妥当性を検証するために、複数の分析者で独立に分析を行い、それぞれの結果がどの程度一致するか、つまり評価者間信頼性 (inter-rater reliability) を確認する作業を伴う。また、近年はコーパスに基づくムーブ分析も注目を浴びているが、より詳しい手順については Biber et al. (2007) を参照されたい。

るよりも、むしろそれらの間の違いについての説明が重要であるとする。また、そもそもムーブ/ステップ分析を用いた研究は何のために行っているものなのかを意識することも必要である。そもそも Swales (1981, 1990) がムーブ分析に取り組んだ目的は、非英語母語話者が英語で研究論文を書き、出版するための支援であった (Moreno & Swales, 2018)。しかし、Cheng (2019) がジャンル分析の先行研究を検討したところ、それらの研究成果の多くは、すでにジャンル研究で確立された知見を再確認するに留まり、教育上のニーズに直接答えているものではなかった。したがって、今後のジャンル分析研究では、それが元々教育的な応用を念頭において提案されたものであるという事実に着目することが重要であろう。実際、Casal & Kessler (2024) は、この分野の研究について教育への実行可能な (actionable) 示唆を明確にすることを推奨している。

3 先行研究の選択的レビュー

3.1 日本語研究論文を対象としたジャンル分析研究

本節及び次節では、日本語研究論文を対象に行われたジャンル分析研究及びその知見を教室に応用したいいくつかの研究についてレビューする。ただし、本稿は、あくまでジャンル分析 (特にムーブ分析) とはどのようなものであるかの紹介を目的としており、包括的なレビューは目指さない。ゆえに、この目的に合致する範囲内で、特徴的と思われる研究を筆者らが主観的に選択していることをあらかじめ断っておく。

佐藤・仁科 (1996) は、管見の限り、日本語研究論文を対象にジャンル分析を行った最初期の研究である。同研究は、Swales の研究についての言及や引用は無いものの、「実際に各専門分野で書かれた学術論文を対象に、どのような記述事項がどのように配列されているかを検討し、その文章の構成の仕方を明らかにする」(佐藤・仁科, 1996: 28) という研究目的から明らかのように、ジャンル研究そのものである。著者らは、工学系の日本語学術論文 14 篇の序論を対象として分析を行った。論文の中で個別の文が果たしている「問題の背景の説明」や「問題の指摘」などの機能を「記述事項」(ステップに相当) として抽象化し、「問題の背景の説明」及び「問題の指摘」の記述事項から構成される「課題の提示」といった上位カテゴリーを「論述事項」(ムーブに相当) として抽出した。そして、論述事項に基づき、序論で議論がどのように展開されているかを分析し、工学論文には「対象の意義の指摘」から始まる「意義指摘型」と、「課題の提示」から始まる「課題提示型」の2種類のパターンを同定した。これをふまえて、佐藤・仁科 (1996: 32) は、序論の書き方に絶対的な規範はないという一般論に理解を示しつつも、「論文の序論の構成には、ある法則が存在する」とし、「作文教育の観点から見た場合、例外にとらわれて学習者を混乱させるよりは、

こう書けばまちがいないという基本ルールを与えることが肝要である」と述べている。佐藤らの研究は、日本語研究論文を対象にジャンル分析の効果を例証し、以降の分野別の研究—農学・工学分野を対象にジャンル分析を行った村岡他（2005）や法学分野を扱った木本（2006）など—の伝統を創り出した点で重要な意義を持つ。

杉田（1997）は、Swales（1990）のジャンル分析に明示的に言及しつつ、歴史学（日本史学）の日本語論文 30 篇を対象に分析を行っている。著者によれば、従来の日本語文章研究における「段落」や「文段」という単位に比べ、Swales のムーブ概念は「文章のある箇所で書き手が何をしようとしているかというコミュニケーション上の意図を考慮した単位であり、本稿で言うところの文章構造の解明にはより有効なもの」（杉田, 1997: 51）である。つまり、同研究では、ジャンル分析の手法としての有効性が明確に支持されている。論文分析の結果として、Swales（1990）の CARS モデルと概ね一致する、3 つのムーブが抽出された。ただし、CARS との違いもあり、歴史学の論文では先行研究をめぐる叙述がまとまりをなすことが多いことから、先行研究への言及がムーブ 2（杉田の言葉では「要素 2」）へと組み込まれている点や、歴史学論文では歴史上の事実の描写やその意義についての記述が多く見られることをふまえ、「史実の解説」というムーブ（「要素 4」）を提案している。杉田の研究は、人文社会科学分野の日本語論文に対してジャンル分析を適用した最初期の研究の一つであり、歴史学論文の構造的特徴を明らかにしたのみならず、分野内での書き手の論理展開の差異について CARS モデルでは扱われていない側面から分析を提示した（例えば、「先行研究への言及」というムーブ 2 について、「従来の一般的な研究動向の紹介」と「個別の研究例の紹介」という 2 つのステップに分け、さらに 4 つの下位パターンを同定している）。この研究は、Swales の CARS モデルに基づきつつも、日本語研究論文の分析を通じて、特定の分野の独自性についての分析を深めるとともに、改めて「専門別日本語教育におけるジャンル分析の重要性」（杉田, 1997: 58）を示している。

大島他（2010）は、人文科学・社会科学・工学の 3 領域、計 14 の学会誌 270 編の論文の序論を対象に分野横断的なジャンル分析を行っており、量と質の面で類を見ないものであった。同研究の成果の一つは、日本語論文の分析を通じて得られた、研究論文の序論に関するムーブ/ステップをまとめた一つのモデルを提示した点である（表 1）⁶。

⁶表 1 では杉田（1997）が提案したムーブ 4（「史実の解説」）が含まれていないが、これは、杉田の分析はあくまで歴史学論文の構造を捉えようとしたものであり、大島他（2010）の分析対象には歴史学の雑誌が含まれていないこと、また、著者らの関心が領域横断的な分析を通じた研究論文の序論の共通性の同定にあったことため、CARS に沿うモデルを採用したと考えられる。

表 1 大島他（2010）による日本語論文序論のムーブ分析⁷

ムーブ 1	「研究の対象と背景の説明」
ステップ	研究対象を示す/問題の現状を説明する/状況の中で特に注目すべき事例に言及する/疑問・推論を提示する/研究の必要性・重要性を示す/用語を定義する/略称を導入する
ムーブ 2	「先行研究の提示・検討」
ステップ	研究分野で共有されている知識を示す/先行研究の存在を示す/先行研究の全体的な特徴を示す/先行研究の知見に言及する/先行研究についての解釈を示す/先行研究が不十分であることを示す
ムーブ 3	「研究目的・研究行動の提示」
ステップ	研究の目的を規定する/リサーチ・クエスチョンを述べる/論文の構成を予告する/論文で扱う範囲を限定する

また、分析の結果、ムーブの展開パターンには領域を超えた一定の共通性があることが見出された。具体的には、3 領域の研究論文について、3 つのムーブが存在する場合には、「研究の対象と背景を説明して研究の必要性を示し、先行研究を検討してその不足点を示し、その研究の目的と課題を設定して研究行動を提示するという展開」（大島他, 2010: 31）が、分析対象となった論文の多く（平均して 43.1%）で観察された。これを受け、大島らは分野が異なる学習者をまとめて相手にすることが多いアカデミック・ライティング指導の現場では、この展開パターンを「典型として学習者に示すことが有効」であると主張している（大島他, 2010: 33）。さらに、人文・社会科学系の分野には、研究の目的や課題の明確化や精緻化を徐々に行うがゆえに、序論以外でも研究課題の設定が繰り返し現れる「課題設定再帰型」と呼ばれる論文が多く存在し、Swales の CARS モデルあるいは科学論文で典型とされる IMRAD (Introducton, Materials and Methods, Results and Discussion) モデルでは捉えきれない実態も明らかにされている。また、経営学・社会学・建築工学の学術誌では、共通して先行研究の比重が大きく、それらが序論以外で独立の章として扱われる場合もあることも観察された。著者らは、これらの観察をふまえ、それらの論理展開構造には、当該分野での「問題への接近の方法が反映されている」と洞察し、論文作成指導においては「分野ごとに定型があるという提示を行うのではなく、その論文の研究手法と『導入部分』の構成との関係に着目させるべき」（大島他, 2010: 33, 下線は引用者）と指摘している。このように、大島らの研究は分野を越えた論文の論理展開の共通性と個別性について重要な知見をもたらしている。

⁷ このムーブ分析モデルは、Swales の CARS モデルと類似性を持つが、各ムーブに対してより細かなステップ（特にムーブ 1）が含まれている点特徴的である。このモデルについては、具体的な例文とともにハンドブック（二通・大島・佐藤・因・山本, 2010）として刊行されている。

佐藤他（2013）は、大島他（2010）をより発展させたものとして、同じ 3 領域計 270 篇の論文を対象に、序論以外の要素（方法・結果・考察）を含めて分析を行い、分野横断的に研究論文の構造の共通性と個別性を探った。著者らは、論文分析を通じて、研究論文に関する 4 つの基本類型（「実験/調査型」「資料分析型」「理論型」「複合型」）及び 11 の下位構造型（例えば「実験/調査型」の場合は「量的データ産出型」「質的データ産出型」「量・質データ産出型」の 3 つの下位パターン）を同定している。この類型によって、例えば工学領域では「実験/調査型」が優勢である一方で、一部に「理論型」も見られるという、より細かな傾向の把握が可能となった。また、佐藤らは、各領域において特定の論文構造型が優勢であるとしても、実際には様々な構造型が観察されるという事実をふまえ、アカデミック・ライティングの指導者はこの多様性に関する事実を銘記すべきであると述べている。そして、分析対象の一つである日本語教育学論文に関して、その約 7 割が「実験/調査型」であった事実は、それらの論理展開構造が工学系論文と類似していることを示唆するとともに、「工学系」や「人文科学系」といった漠然としたカテゴリーによって当該分野の研究論文を特徴づけることには妥当性が無い可能性を示している。ゆえに、佐藤らは一つの重要な結論として、研究論文を書く場合には「分野よりは研究主題と研究手法に即した構造型を見極めること」（佐藤他, 2013: 96）が肝心であるという重要な洞察を導いている。

以上のように、日本語研究論文を対象としたジャンル分析には一定の蓄積があり、専門日本語の研究や日本語論文作成指導に携わる者にとって有用な知見を生み出している。今後の研究の方向性としては、佐藤・仁科（1996）、杉田（1997）、村岡他（2005）、木本（2006）らの先行研究を参考に、自らの専門性を活かして未開拓領域（経済学や心理学など）の研究論文を対象にジャンル分析を行うことができよう。佐藤他（2013）のように、各分野の専門家と協働しながらジャンル分析を試みることも効果的である。なお、その際には、三谷（2022）が指摘するように、これまでの日本語アカデミック・ライティング教育研究では、序論に焦点を当てたジャンル分析の研究が多いことから、本論や結論部分にまで射程を広げていくことも重要となる。他にも、佐藤他（2013）で示された論文の構造類型を参考に、より詳細に対象分野の論文を分析して指導に役立つ知見（例えば、ある分野の「実験/調査」型論文における考察部分の表現の特徴や論理展開のパターン）を探ることで、即応的な知見を生み出すことができる。あるいは、海外でのジャンル分析で取り入れられているように、コーパスに基づいたムーブ/ステップ分析を行う試みや、テキスト分析を越えて、分野専門家を対象にインタビューを実施し、認知的な側面からジャンル分析のさらなる妥当化を図る研究も必要だろう。

3.2 日本語アカデミック・ライティング指導への応用

前節でレビューした研究は、日本語研究論文についてジャンル分析を行ったものであり、教育への応用を考える場合の基礎的研究と言えるが、一方で、ジャンル分析の成果を教室現場に取り入れる実践も行われており、一定の成果を挙げている（永井・柳本, 2021, 2023; 大島, 2009; 佐藤, 2006, 2009）。以下では、これらの研究をレビューする。

佐藤（2006）は、学習者の各専門分野の学術文章の特徴に対応したライティング技能を養成することを目指し、専門分野が異なる 21 名の留学生（修士課程レベル）が受講する日本語科目において、実際の論文を「サンプル論文」として教材に用いた実践を報告している。授業では、分野を問わず論文に共通して認められる構成要素や展開パターンを紹介する教科書（アカデミック・ジャパニーズ研究会, 2002）を用いて論文の書き方についての基本知識が教えられるとともに、その知識を活用してサンプル論文を学習者自身に分析させることで、分野に特徴的なムーブ/ステップへ意識を向けさせる工夫がなされていた。授業評価アンケートによると、授業への肯定的な評価に加え、学習者が自ら選択したサンプル論文を教材にできることによる動機づけの高まりや、他分野の学習者との交流及び異なる分野のサンプル論文との関わりを通じて論文の書き方に関する視点が広がったことについて言及されていた。特に後者の点について、多くの学習者が「多様な専門分野の学生が同じクラスで学ぶことに積極的な意義を見出していた」（佐藤, 2006: 42）ことは、ライティング教育の現場を考えると、価値のある発見であろう。この研究は、多くの教室現場で多様な専門分野の学生を対象に日本語論文作成指導を行わなければならない現状において、一つの有用な解決策を提示した点で意義がある。

佐藤（2009）は、佐藤（2006）におけるサンプル論文の利用法の検討が限定的であったことをふまえ、その活用方法について、より細かな検討を加えた授業実践を報告している。具体的には、いくつかのサンプル論文をクラス共通の教材として用いる「共同利用」と、各受講者が自分で選んだサンプル論文を教材として用いる「個別利用」に分け、それらを書き言葉の特徴など教科書に基づいて行われる指導である「論文についての学習」と組み合わせることで、それぞれ 3 通りの利用方法を例示し、解説している（図 4）。

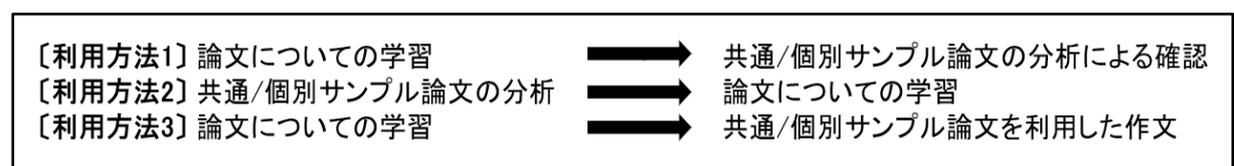


図 4 サンプル論文の利用方法(佐藤(2009)に基づき筆者作成)

科目を通じた課題提出率の高さ（平均 85.9%）に加え、学習者アンケートによれば、学習者が科目に非常に満足していること、そして、回答者の全員がサンプル論文の利用について肯定的に評価をしていることが明らかになった。つまり、この共通のサンプル論文と各分野のサンプル論文を組み合わせる教育設計は、学習者のモチベーションとコミットメントを高める可能性が示唆されている。この教育実践は、高等教育で論文作成指導を行っている多くのアカデミック・ライティング指導者にとって大いに参考になる。

大島（2009）は、学部3年次の留学生に対する日本語教育において「論文スキーマ」—「論文がどのような要素から構成され、どのような言語形式で示されることが多いかについての知識」（大島, 2009: 49）—の獲得を主に支援する授業実践を報告している。この1学期間の授業実践では、15名の留学生を対象に、まず論文に典型的に見られる文型や表現について教師が解説を行い、そして論文の構成要素を学ぶため、学習者が自分の分野の先行研究を対象として「研究対象の提示」などのステップ（大島は「研究行動」と呼ぶ）を読み取り、抽出する学習活動を行わせた。学習者の振り返りの記述から、学習者が論文の構成要素だけでなく、分野論文のステップ（「先行研究の存在を示す」など）を含む論文スキーマを獲得したことが示唆され、ジャンル分析に基づいたライティング指導の有効性が示された。また、実践の中での気づきとして、論文ジャンルの指導においては、理解から産出まで一足飛びに行うのではなく、「理解・発信・理解・発信…」の学習活動の繰り返しや「内容・言語・内容・言語…」のように学習内容を交互に繰り返すなど、徐々にスキーマを形成・補強していく「壁のうす塗り・重ね塗り」手法が有効であることを指摘している。この研究は、研究経験の限られた学部生を対象とした実践という点で価値があり、また、随所に丁寧な工夫がなされている点も参考になる。

永井・柳本（2021）は、佐藤（2006, 2009）及び大島（2009）を参考にしながらも、それらの学習成果の評価が学習者アンケートや振り返りの記述に留まっている限界を指摘し、ジャンル分析に基づく指導によって、実際に学習者の論文を書くスキルがどの程度向上するのかを直接評価することを試みた。この研究は、大島他（2010）の日本語ムーブ分析モデルに基づき、二通他（2010）を教材として活用しながら、研究論文の序論の執筆に焦点を当てた日本語論文作成指導科目（8週のターム科目、オンラインで実施）の授業実践について報告している。授業を通じてムーブ/ステップの概念を学習者に明示的に教えた結果、プレ/ポスト形式で与えた序論執筆課題についてルーブリックを用いて評価を行ったところ、学習者がムーブ/ステップの概念を実際の序論のライティングに活用していることが見出された。同研究は、序論部分のみの執筆に焦点を当てているため、論文作成指導としては汎用性の面で限界もあるが、ムーブ/ステップ分析を明示的に教えることで学習者の論文執筆能力が向上することを、

直接評価を通じて示した点に意義がある。また、永井・柳本（2023）は、永井・柳本（2021）の「追試」を試み、その知見の「再現性」についてさらなるエビデンスを提供している。

これらの教育実践は、従来のアカデミック・ライティング教育とは異なり、研究論文というジャンルに明確に焦点を当て、学習者が論文の書き方の基礎知識のみならず、ムーブ/ステップといったジャンル分析で用いられてきた修辭的概念を理解し、実際の論文執筆へ応用できるように支援を目指すものである。どの教育実践においても、今後の発展に期待が持てる成果が得られている。研究論文のライティング指導で最も懸念されることは、指導者と学習者の専門分野が異なる場合の不安及びその対応であろう。だが、佐藤（2006, 2009）や大島（2009）が示したように、サンプル論文を積極的に活用し、学習者に自分で専門分野の論文について学習させることが可能である。または、研究分野を越えて共通する論理展開を軸に教える永井・柳本（2021, 2023）のアプローチもある。よって、高等教育で日本語アカデミック・ライティング指導に携わる者は、少なくとも自らの専門分野と学習者の専門分野が合致しないことを理由に学習者の日本語論文作成指導を避ける必要はなく⁸、研究論文ジャンルに関する共通性と個別性を学習者に効果的に学ばせる方法を考えることに注力すべきである。ジャンル分析に基づく日本語アカデミック・ライティング教育の実践報告は未だ数が少ないため、今後一層の取組が期待される。

4 おわりに

本稿は、日本語アカデミック・ライティング教育に携わる研究者及び実践者に向けて、ジャンル分析の主要概念及び関連する先行研究について紹介することを目的としていた。

ジャンル分析については、John M. Swales による一連の研究及び CARS モデルを簡潔に紹介し、また、ムーブ/ステップ分析の基本的な手順や多様化されつつある研究手法についても説明した。さらに、近年の研究動向への批判についても言及した。

日本語研究論文を対象に行われた国内の先行研究については、ジャンル研究そのものを行うものと、その知見を教室現場に応用する二種類の研究を選択的にレビューした。ジャンル研究では、日本語論文を対象に行われた最初期のジャンル分析を取り上げ、また、質的な面でも量的な面でも日本語論文のジャンル研究を大きく前進させた大島他（2010）の分野横断的研究及び研究方法を考慮した研究型を分析する佐藤他

⁸ 付け加えるなら、そもそも専門分野が合致するという場面は現実には多くない。佐藤他（2013）が明らかにしたように、例えば日本語教育学分野の論文の多くは「実験/調査型」の論文であるが、「日本語教育学」を専門にする者全員が実験型の研究手法に詳しいとは限らない。

(2013) の研究をレビューした。教室実践研究では、ジャンル分析の知見を応用したアカデミック・ライティング指導実践を行い、期待できる成果を得られた研究をレビューした。また、いずれの種類の研究についても、今後求められる研究の方向性を示唆した。

本論考を執筆する中で、筆者らは日本語論文の作成指導に関わる身として、改めて「専門別日本語教育におけるジャンル分析の重要性」(杉田, 1997: 58)、海外での研究と比べても遜色のない日本語ジャンル研究の水準の高さ、そして教育への有効性を認識することとなった。今後、より一層多くの研究者と実践者が日本語ジャンル研究に関心を示し、実際にこのコミュニティに参加することを願いながら結語としたい。

引用文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2002) 『大学・大学院留学生の日本語 4 論文作成編』 アルク
- Biber, U, Connor, U., Upton, T. A., & Kanoksilapatham, B. (2007). Introduction to Move Analysis. In D. Biber, U. Connor, & T. A. Upton (Eds.), *Discourse on the Move: Using Corpus Analysis to Describe Discourse Structure* (pp.23-41). John Benjamins.
- Casal, J. E., & Kessler, M. (2024). Rhetorical move-step analysis. In M. Kessler & C. Polio (Eds.), *Conducting genre-based research in applied linguistics: A methodological guide* (pp.82-104). Routledge.
- Cheng, A. (2019). Examining the “applied aspirations” in the ESP genre analysis of published journal articles. *Journal of English for Academic Purposes*, 38, pp.36-47.
- Connor, U. & Mauranen, A. (1999). Linguistic analysis of grant proposals: European Union research grants. *English for Specific Purposes*, 18(1), pp.47-62.
- Cortes, V. (2013). The purpose of this study is to: Connecting lexical bundles and moves in research article introductions. *Journal of English for Academic Purposes*, 12(1), pp.33-43.
- Hyland, K. (2012). *Disciplinary identities: Individuality and community in academic discourse*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 木本和志 (2006) 「法学系論文の序論に見られる文章構造の分析—民法、商法、知的財産権法系論文を対象に一」『専門日本語教育研究』, 第 8 号, pp.19-26.
- 三谷彩華 (2022) 「アカデミック・ライティング教育に関する日本語教育学研究の課題と展望—日本語の研究論文を対象とした研究の概観—」『江戸川大学紀要』, 第 32 号, pp.347-354.
- Moreno, A., & Swales J. (2018). Strengthening move analysis methodology towards bridging the function-form gap. *English for Specific Purposes*, 50, pp.40-63.
- 村岡貴子・米田由喜代・因京子・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也 (2005) 「農学系・工学系論文の『緒言』の論理展開分析—形式段落と構成要素の観点から—」『専門日本語教育研究』, 第 7 号, pp.21-28.
- 永井敦・柳本大地 (2021) 「学術論文の序論作成指導におけるムーブ分析の応用」『専門日本語教育研究』, 第 23 号, pp.43-50.
- 永井敦・柳本大地 (2023) 「『ムーブ』にもとづく日本語論文作成指導の効果に関するエビデンス」『広島大学森戸国際高等教育学院紀要』, 第 5 号, pp.15-26.
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2010) 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会

- 大島弥生 (2009) 「学部留学生に対する論文読解の支援の試み—論文スキーマの育成をめざして—」
『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』, 第 1 号, pp.48-56.
- 大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・二通信子 (2010) 「学術論文の導入部分における展開
の型の分野横断的比較研究」『専門日本語教育研究』, 第 12 号, pp.27-34.
- 佐藤勢紀子 (2006) 「多様な専門分野のサンプル論文を用いたアカデミック・ライティングの指導法」
『専門日本語教育研究』, 第 8 号, pp.39-44.
- 佐藤勢紀子 (2009) 「サンプル論文で学ぶ論文作成の技法—「研究のための日本語スキル」授業報告
—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』, 第 1 号, pp.37-47.
- 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子 (2013) 「学術論文の構造型と
その分布—人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に—」『日本語教育』, 第 154 号, pp.85-99.
- 佐藤勢紀子・仁科浩美 (1996) 「工学系学術論文における序論の構成の分析」『東北大学留学生セン
ター紀要』, 第 3 号, pp.26-34.
- 杉田くに子 (1997) 「上級日本語教育のための文章構造の分析—社会人文科学系研究論文の序論—」
『日本語教育』, 第 95 号, pp.49-60.
- スウェイルズ ジョン・フィーク クリスティン (1998) 『効果的な英語論文を書く: その内容と表現』
大修館書店
- Swales, J. (1981/2011). *Aspects of article introductions*. University of Michigan Press.
- Swales, J. (1990). *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings*. Cambridge University Press.
- Swales, J. (2004). *Research Genres*. Cambridge University Press.
- Swales, J. (2019). The futures of EAP genre studies: A personal viewpoint, *Journal of English for Academic
Purposes*, 38, pp.75-82.
- Tardy, C.M., Caplan, N.A., & Johns, A. (2023). *Genre Explained: Frequently Asked Questions and Answers about
Genre-Based Instruction*, University of Michigan Press.
- 保田幸子 (2021) 『英語科学論文をどう書くか: 新しいスタンダード』 ひつじ書房